

諜報工作と日本語普及が無縁でなかったこと チェンマイ日本語学校の存在を知る

戦前・戦中のタイにおける日本語普及と諜報工作

チェンマイ日本語学校とインパール作戦

山口雅代 著



在チェンマイ日本国総領事館によると2011年
北部タイに暮らす日本人は約3,400人と報告されている。
しかし、70年前に1万人以上の日本人がいたことは、
あまり知られていない。



- 日本はタイでどのような野望を持ち、それが敗戦でどのように頓挫したのか？
- 戦前・戦中の日本語普及が現在のタイにどのように影響しているかを、タイ王国元日本留学生協会を通して見る

戦前・戦中のタイにおける日本語普及と諜報工作

チェンマイ日本語学校とインパール作戦

山口雅代 著

B5判・並製カバー装・250頁 定価(本体4,000円+税)

ISBN978-4-283-01340-7

(2016.7刊)

戦前・戦中のタイにおける日本語普及と諜報工作

チェンマイ日本語学校とインパール作戦

山口雅代 著



大空社

【目次より】

第1章 日本における戦前・戦中の日本語普及の動き

- 1.1 外務省文化事業の始まり(1930年代前半まで)
- 1.2 国際文化事業から文化宣伝へ(1930年代中頃から1940年まで)
- 1.3 南方文化工作(開戦前後期から敗戦まで)
 - 1.3.1 大東亜共栄圏下の日本語普及
 - 1.3.2 国際文化振興会の活動

第2章 日本における戦前・戦中のタイに関連した日本語教育の動き:楽屋

- 2.1 黎明期(1930年代前半まで)
- 2.2 文化事業の実践(1930年代中ごろから1941年まで)
 - 2.2.1 日タイ文化研究所設立以前
 - 2.2.2 日タイ文化研究所設立
 - 2.2.3 タイからの留学生
- 2.3 開戦後から敗戦まで
 - 2.3.1 対タイ施策
 - 2.3.2 日タイ文化協定
 - 2.3.3 日タイ文化会館
 - 2.3.4 国際文化振興会の活動
 - 2.3.5 タイからの留学生とその周辺

第3章 戦前・戦中のタイの独立維持と日本軍

- 3.1 植民地化の脅威:日英仏の動き(1930年代前半まで)
- 3.2 植民地化の脅威:ピブン首相の動き(1930年代中頃から1940年ごろまで)
- 3.3 日本軍の動きと終戦(1940年ごろから終戦まで)

第4章 戦前・戦中のタイにおける日本語教育とその影響:舞台

- 4.1 黎明期(1930年代前半まで)
- 4.2 外務省文化事業部主導の日本語普及(1930年代中頃から1940年ごろまで)
 - 4.2.1 日タイ文化研究所バンコク日本語学校設立計画
 - 4.2.2 初期のバンコク日本語学校
- 4.3 もう一つの日本語普及の動き(日本軍上陸前後期から敗戦まで)
 - 4.3.1 タイでの国際文化振興会の活動
 - 4.3.2 日本軍上陸前後期の在タイ日本大使館と日タイ文化研究所
 - 4.3.3 バンコク日本語学校
 - 4.3.3 日本会館構想と敗戦
- 4.4 バンコク日本語学校が遺したもの
 - 4.4.1 日本語学校
 - 4.4.2 訪問調査

第5章 戦時下のチェンマイ日本語学校

- 5.1 聞き取り調査方法
 - 5.1.1 調査協力者
 - 5.1.2 聞き取りの記述方法と内容
- 5.2 戦時下のチェンマイの様子
 - 5.2.1 チェンマイの日本軍とチェンマイの様子
 - 5.2.2 チェンマイの日本軍とボルネオ・カンパニー
- 5.3 チェンマイ日本語学校
 - 5.3.1 電話での聞き取り
 - 5.3.2 面接調査
- 5.4 チェンマイ日本語学校とその後

第6章 結論と今後の課題

- 6.1 研究課題1:タイの日本語普及と日本軍の関係
- 6.2 研究課題2:チェンマイの日本語普及について

資料 「興亜院ノ設置二伴フ同院ノ関係各庁トノ間ニ於ケル事業分界」大東亜共同宣言/日本語の教科書とその題材/日タイ文化協定

付録 主要人物・事項解説

日本とタイの日本語普及に関連する年表

組見本

チェンマイ領事館開設目的は、戦争準備のための軍事情報収集であった。1942年1月9日にチェンマイにおいても南機関ビルマ義勇軍の募集があった。さらに、領事館には陸軍参謀本部派遣の白貝少佐が清水壽一という偽名を使い勤務していたが、開戦と共に軍服に着替えて領事官から出ていった。以上のことから、チェンマイやチェンマイ領事館でも諜報工作が行われていたことがわかる。

また、チェンマイにはビルマに行く日本兵やその日本兵を教育する部隊が駐屯した。チェンマイの日本軍は、北部タイの防衛、ビルマの後方支援や食料の調達もさることながら、ビルマへの近道である最後の3本目の道路建設という目的も担った。しかし、3本目の道路は、チェンマイからビルマへ向かう時には、間に合わず、惨敗によりビルマから北部タイへ逃げ帰る通称白骨街道となった。チェンマイはビルマへの後方支援のための最前線の場であり、ビルマから逃げ帰る日本兵にとっては、日本に帰れる抛り所となった場所であった。

終戦後、タイに在住する日本人は、すべての財産を没収され抑留所に入れられた。一方、タイはバンコク市長からだとして、日本人が抑留後帰国する際に米と砂糖を配った。

タイから学ぶもの、それは、ワチラーウット王が言ったように、小国であるタイは身のほどを心得て、将来に怨みを遺すことがないようにとした言葉にある。どの国に對しても怨みを遺さないようにすること、戦前・戦中アジアに對しての驕りを反省し、日本が見習わなければならない点である。

このタイにおける日本軍の動きと日本語普及がどう関係があったのかについては、第4章、第5章で述べる。第4章は日本軍

著者紹介 山口雅代(やまぐちまさよ)

(東京福祉大学教育学部・大学院講師)

1992年大阪外国語大学卒、1994年大阪府立大学学術修士、2013年名古屋外国語大学大学院博士後期課程満期退学、2015年日本語学・日本語教育学博士。

1992年から兵庫県国際交流協会、日本国際協力センター、エールネットワーク専門学校、ヒューマン・アカデミーなどで日本語教育に携わる。1999年から2002年まで国際交流基金チェンマイ大学派遣日本語教育専門家、帰国後大阪府立大学高等教育推進機構、三重大学国際交流センター、名古屋外国語大学日本語教育センター、関西学院大学国際学部等で非常勤教師。2015年から東京福祉大学教育学部・大学院講師。

主な論文に「文化リテラシーを目指した「日本事情」教育」——大阪府立大学での試みについて(『人間文化科学研究集録』14号、大阪府立大学大学院人間文化科学研究科、2004年)、「対外日本語普及を考える——タイにおける仏英独中の対外言語普及活動事例を通して——」(『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』9号、2012年)など。

学術図書出版

発行 **大空社**

〒114-0032

東京都北区中十条4-3-2

TEL: 03-6454-3400

FAX: 03-6454-3433

http://www.ozorasha.co.jp

eigy@ozorasha.co.jp

*お取り扱